

Backup ExecTM System Recovery 8.5

Server Edition

クイックスタートガイド


The NEC logo is displayed in a bold, blue, sans-serif font.

改版履歷

[illegible]

商標について

Microsoft、Windows、Windows Server は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

また、Backup Exec は、Symantec Corporation または関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Windows 2003 R2 は Microsoft Windows Server 2003 R2, Standard Edition、Microsoft Windows Server 2003 R2, Enterprise Edition および Microsoft Windows Server 2003 R2, Datacenter Edition の略称です。Windows 2003 は Microsoft Windows Server 2003, Standard Edition、Microsoft Windows Server 2003, Enterprise Edition および Microsoft Windows Server 2003, Datacenter Edition の略称です。Windows 2000 は Microsoft Windows 2000 Server operating system、Microsoft Windows 2000 Advanced Server operating system、および Microsoft Windows 2000 Professional operating system の略称です。Windows 2008 は Microsoft Windows Server 2008, Standard Edition、Microsoft Windows Server 2008, Enterprise Edition および Microsoft Windows Server 2008, Datacenter Edition、Microsoft Windows Server 2008, Web Server Edition の略称です。

本書のサンプル画像などで使用している名称は、すべて架空のものです。実在する品名、団体名、個人名とは一切関係ありません。

記載の会社名および商品名は各社の商標または登録商標です。

ご注意

- (1) 本書の内容の一部または全部を無断転載することは禁止されています。
- (2) 本書の内容に関しては将来予告なしに変更することがあります。
- (3) NEC の許可なく複製・改変などを行うことはできません。
- (4) 本書の内容及び本書を使用した結果について明示的にも黙示的にも一切の保証を行いません。

© NEC Corporation 2009

はじめに

Backup Exec System Recovery はご購入いただいたほとんどのお客様のご要求を満たすように最適化されていますが、より正しく製品をお使いいただくために追加設定が必要になることがあります。ソフトウェアをインストールする前に、下記のリンクから製品の設定に関する重要な情報と重大な警告についてのドキュメントを参照してください。ドキュメントには製品がお客様の環境に合わせて適切に設定されているかどうかを確認する方法に関して詳細な情報が記載されています。なお、ドキュメントはすべて英語のみで記載されています。 <http://seer.entsupport.symantec.com/docs/294260.htm>

このドキュメントは、**Backup Exec System Recovery 8.5 Server Edition** を利用されるにあたり、事前に製品概要やインストール、利用方法についての概要を理解していただくことを目的に記述されています。

詳細な機能や設定方法などにつきましては、ユーザーズガイドをご確認ください。ユーザーズガイドは、**Backup Exec System Recovery 8.5 Server Edition** インストール CD-ROM の直下の docs フォルダにあります。(ファイル名： USERGUIDE_JA.PDF)

目次

1	動作概要	1
1.1	主な製品コンポーネント	2
2	システム要件	3
3	リカバリディスクの検証	5
3.1	検証の準備	5
3.2	検証の実行	5
4	Backup Exec System Recovery のインストール	15
4.1	インストールのための準備	15
4.2	インストールの実行	15
5	バックアップ	22
5.1	コンピュータのスケジュールバックアップ	22
5.2	バックアップに関するアドバイス	30
6	リカバリ	32
6.1	リカバリディスクによるコンピュータの復元	32
6.2	ファイルやフォルダの復元	41
7	注意制限事項	45
8	FAQ	48
9	障害時の問い合わせ方法	49
9.1	SeaSTログ採取方法	50
9.2	リカバリディスク起動時のSeaSTログ採取方法	54

1 動作概要

Backup Exec System Recovery はディスクやドライブを丸ごとイメージ化してバックアップを行う製品です。

Backup Exec System Recovery が、バックアップを行うと、ハードディスクのその時点での仮想ボリュームイメージを作成します。仮想ボリュームイメージは、ハードディスク内の単なるファイルコピーではありません。ハードディスク構造全体 (セクタおよびクラスタ) のイメージであり、そのデータは圧縮されて 1 つのファイルに書き込まれます。この仮想ボリュームイメージは、ボリュームの空き領域と **RAM** に一時的に格納されます。次に、この仮想ボリュームイメージの情報に基づいて、実際のリカバリポイント (バックアップイメージファイル) を生成します。

このように、**Backup Exec System Recovery** は、仮想ボリュームイメージからリカバリポイントを作成するため、コンピュータの動作を妨害したり中断したりすることなく、バックアップをすばやく実行します。バックアップ処理の作動中にも、ユーザ権限の管理、サーバアプリケーションやツールの実行など、コンピュータの機能を継続して実行することができます。

また、リカバリディスクを使用することで、短時間にシステムを復旧することができます。アプリケーションや各種設定もバックアップするため、**OS** やアプリケーションの再インストール、設定を行うことなく、システムの復旧が可能です。

1.1 主な製品コンポーネント

Backup Exec System Recovery には、プログラム本体とリカバリディスクの 2 つのコンポーネントが含まれます。

主なコンポーネント	説明
Backup Exec System Recovery プログラム (ユーザインタフェース)	Backup Exec System Recovery プログラムでは、コンピュータのバックアップを定義、スケジュール、実行を行います。バックアップを実行すると、コンピュータのリカバリポイントが作成され、このリカバリポイントを使用して、コンピュータ全体、または個別のドライブ、ファイル、フォルダを修復できます。
リカバリディスク	コンピュータの OS に障害が発生した場合、リカバリディスクで起動後、リカバリポイントを指定することでシステムドライブを修復します。 リカバリディスク には、コンピュータに対応したネットワークとストレージデバイスのドライバが含まれている必要があります。事前に本書第 3 章「 リカバリディスクの検証 」を参照して、リカバリディスクで起動できることを検証してください。もし、検証テストに失敗した場合は、ユーザーズガイド 第 3 章「カスタム Symantec Recovery Disk CD の作成」を参照して、カスタムリカバリディスクを作成してください。

2 システム要件

◆ Backup Exec System Recovery 8.5 Server Edition のシステム要件

項目	内容
OS	32bit 版 • Windows Server 2008 Standard / Enterprise / Datacenter / Server Core (SP なし) ※1 ※2 • Windows Web Server 2008 (SP なし) • Windows Server 2003 R2 Standard / Enterprise / Cluster Node (SP2) ※3 • Windows Server 2003 Standard / Enterprise / Cluster Node (SP2) ※3 • Windows Storage Server 2003 R2 (SP2) ※3 • Windows Storage Server 2003 (SP2) ※3 • Windows 2000 Advanced Server (SP4 以降) ※3 ※4 • Windows 2000 Server (SP4 以降) ※4 64bit 版 • Windows Server 2008 Standard / Enterprise / Datacenter / Server Core (SP なし) ※1 ※2 • Windows Web Server 2008 (SP なし) • Windows Server 2003 R2 Standard / Enterprise / Cluster Node (SP2) ※3 • Windows Server 2003 Standard / Enterprise / Cluster Node (SP2) ※3 • Windows Storage Server 2003 R2 (SP2) ※3 • Windows Storage Server 2003 (SP2) ※3 ※1 Windows 2008 Server Core では、ユーザーインターフェース無しの Backup Exec System Recovery エージェントのみローカルからインストールすることが出来ます。 また、Backup Exec System Recovery Manager での管理を行うことはできません。 ※2 Backup Exec System Recovery をインストールした他の装置から操作を行うためには、ファイアウォールの設定を変更する必要があります。詳しい情報については以下の URL を参照してください。 http://seer.entsupport.symantec.com/docs/294972.htm

	※3 クラスタ環境でご使用していただくことは可能ですが、フェイルオーバーには対応しておりません。 ※4 Windows 2000 ではオフサイトコピーの保存先を FTP サーバとすることはできません。
メモリ	各コンポーネントを実行するためには以下のサイズのメモリが必要です。 • Backup Exec System Recovery Agent : 512MB • Backup Exec System Recovery ユーザーインターフェースと Recovery Point Browser : 512MB
ディスク	インストールするコンポーネントごとに以下の空き容量が必要です。 • Backup Exec System Recovery : 390 MB • Microsoft .NET Framework 2.0 : 280MB (x86)、610MB (x64)
リカバリディスク 使用時のメモリ	• 日本語版 リカバリディスク : 768MB 以上（ビデオカードなどが使用するメモリサイズを除く）のメインメモリが必要 • 英語版 リカバリディスク : 512MB 以上（ビデオカードなどが使用するメモリサイズを除く）のメインメモリが必要

3 リカバリディスクの検証

システムを復旧する場合は、リカバリディスクを使用して **Backup Exec System Recovery** を起動します。リカバリディスクの中には、ディスクやネットワークを認識するためのデバイスドライバが、あらかじめ格納されていますが、お客様の装置のストレージやネットワークに対応したドライバが格納されていない場合もございます。

そのような場合には、リカバリディスクをカスタマイズしていただく必要があります。弊社では、早い段階でリカバリディスクを検証していただくことを強くお奨めしますので、運用に先立って、リカバリディスクの検証を必ず実施してください。

また、検証で問題がない場合でも、実際にリストアを行うとエラーが発生する場合もございますので、事前にリストア確認が可能な環境であれば、リストア確認まで実施されることを推奨します。もし、リストア中にエラーが発生した場合は、デバイスドライバのベンダーより **Windows Server 2008** 対応の最新ドライバを入手してリカバリディスクをカスタマイズしたのち、改めてリストア確認を実施してください。既にシステム運用中のお客様などにおいて、事前にリストア確認ができない場合は、リストア時のエラーに備え、あらかじめデバイスドライバのベンダーより、該当する最新のドライバを入手しておくことを推奨します。なお、リカバリディスクのカスタマイズ方法につきましては、ユーザーズガイド 第 3 章 「カスタム Symantec Recovery Disk CD の作成」を参照してください。

3.1 検証の準備

以下を準備してください。

- リカバリディスク を用意します。
- リカバリポイントを保存するための共有フォルダを用意します。（ネットワーク上にリカバリポイントを保存する場合のみ）

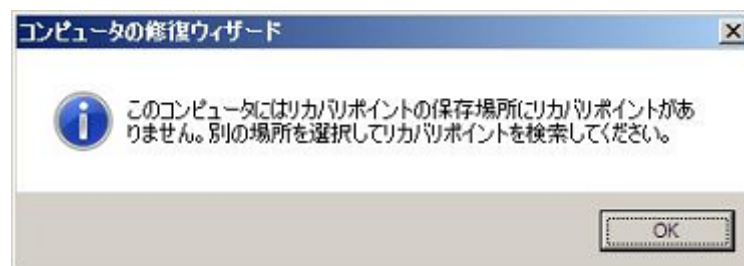
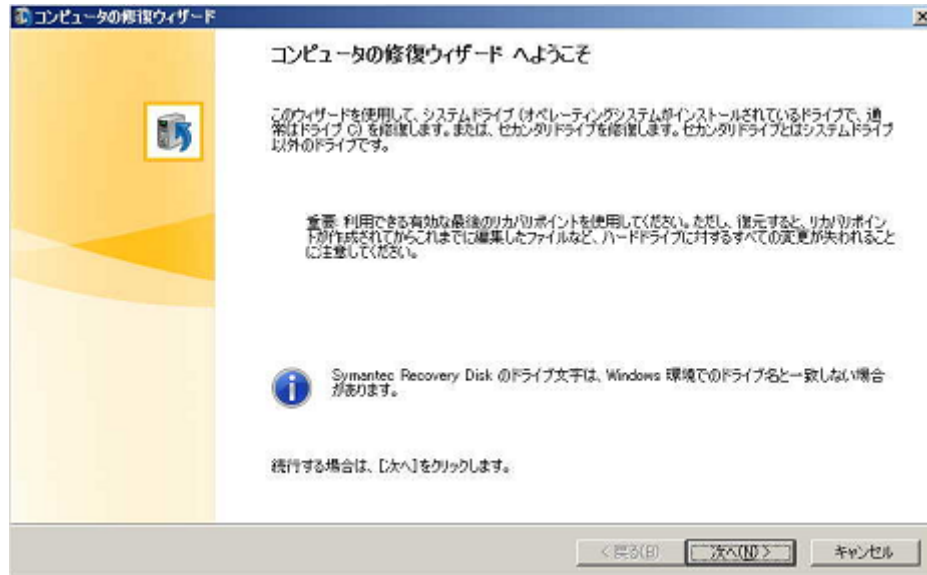
3.2 検証の実行

以下の手順に従って、リカバリディスクの検証を行ってください。もし、検証でディスクやネットワークが認識できなかった場合は、ユーザーズガイド 第 3 章 「カスタム Symantec Recovery Disk CD の作成」を参照して、カスタムリカバリディスクを作成してください。

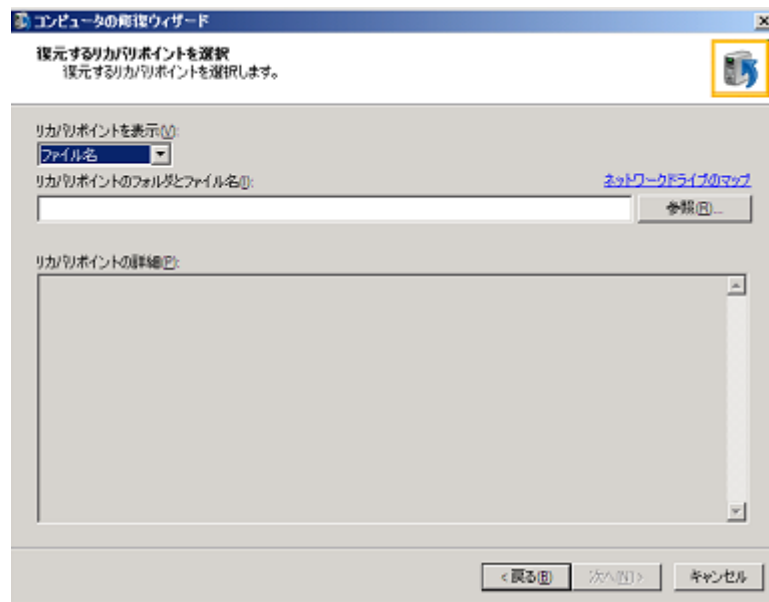
1. リカバリディスク を CD-ROM ドライブにセットし、CD よりシステムを起動します。
2. [エンドユーザー使用許諾契約] 画面が表示されますので、使用許諾規約の条項を一読し、同意する場合は [同意する] ボタンをクリックします。
3. ネットワークサービス起動確認画面が表示されますので、[はい] ボタンをクリックします。10 秒間何も選択しないと [はい] ボタンを選択したとみなし、自動的に次へ進みます。
4. まずは、ストレージデバイスのドライバを確認するため、[修復] → [コンピュータを修復] をクリックします。



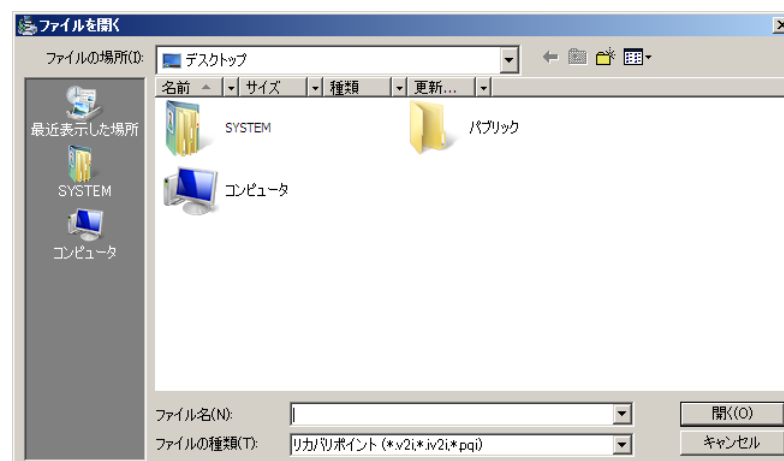
5. 以下の画面が表示されますので、[次へ] ボタンをクリックします。



7. 以下の画面が表示されますので、[表示] 項目のプルダウンメニューで [ファイル名] を選択し、[参照] ボタンをクリックします。



8. コンピュータをダブルクリックします。



9. 以下の画面で選択できるドライブに検証しているコンピュータのローカルディスクが表示されていることを確認してください。**Boot(X:)** のみが表示されている場合は、リカバリディスクにストレージデバイスのドライバが含まれておらず、このままでは修復を行うことができませんので、検証終了後に必ずカスタムリカバリディスクを作成してください。

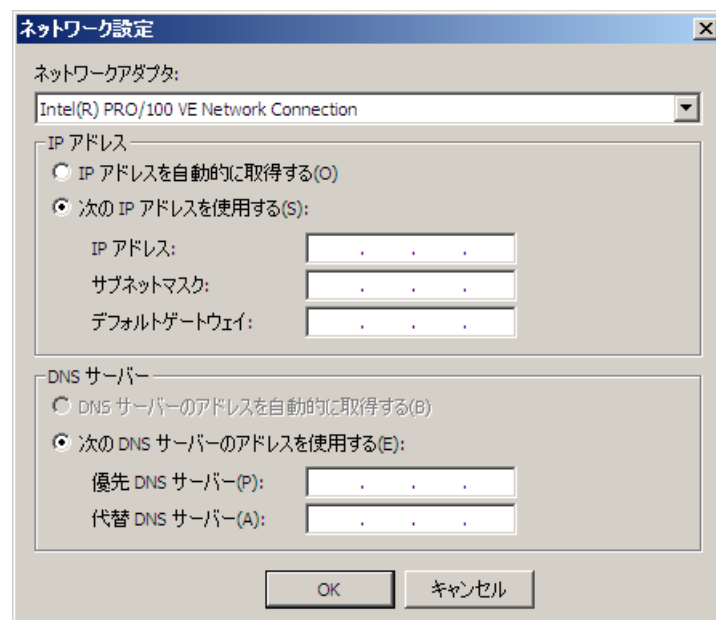


10. [キャンセル] ボタンを2回クリックして、修復ウィザードを終了してください。リカバリポイントをローカルディスクに保存する場合は、ここで確認終了となりますので項番 18 に進みます。ネットワーク上の共有フォルダにリカバリポイントを保存する場合は、続けてネットワークドライバの確認を行います。このとき、DHCP 環境でない場合は IP アドレスの設定が必要になりますので、項番 11 に進みます。DHCP 環境の場合は設定する必要がありませんので、項番 13 に進みます。

11. [ネットワーク] → [ネットワーク接続を設定] をクリックします。



12. [次の IP アドレスを使用する] のラジオボタンを選択し、適切な値を入力します。入力が終わったら [OK] ボタンをクリックします。



- ネットワークアダプタは 1 枚のみ指定可能です。

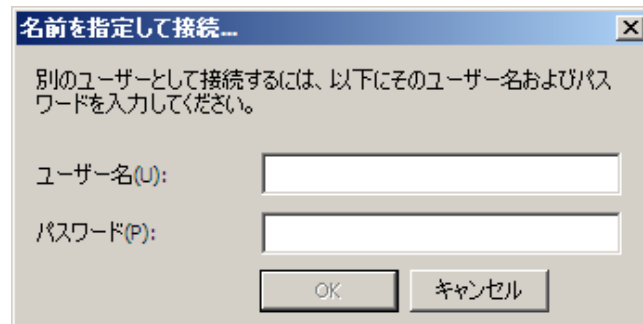
13. [ホーム] → [ネットワーク ドライブの割り当て] をクリックします。



14. 以下の画面が表示されますので、使用するドライブ名を選択し、[フォルダ] のテキストボックスにリカバリポイントが保存されているコンピュータ名および共有フォルダへのパスを入力します。入力が終わったら [異なるユーザー名で接続します] をクリックします。



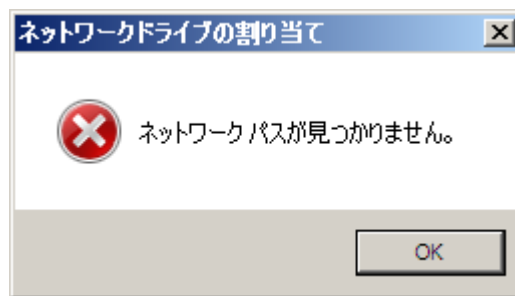
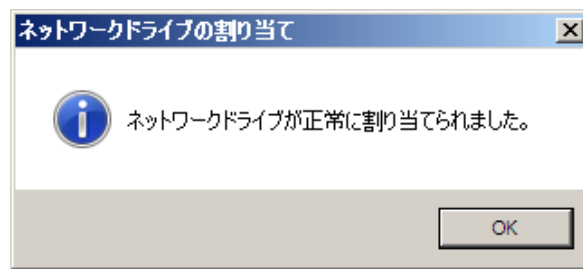
15. 適切なユーザ名とパスワードを入力し、[OK] ボタンをクリックします。



16. [OK] ボタンをクリックします。(共有フォルダ名を指定しても、[OK] ボタンが無効の場合は、共有フォルダ名の後ろにスペースを入力すると、[OK] ボタンが有効になります。有効になった後、入力したスペースを削除してください。)



17. 接続が終了し、「ネットワークドライブが正常に割り当てられました。」というメッセージが表示されることを確認してください。ネットワーク自体に障害がないにも関わらず「ネットワークパスが見つかりません」などのメッセージが表示され正常に終了しない場合は、リカバリディスクにネットワークドライブが含まれておらず、このままでは修復を行うことができませんので、検証終了後に必ずカスタムリカバリディスクを作成してください。[OK] ボタンをクリックしてください。



18. メニュー右下の [終了] をクリックします。



19. 以下の画面が表示されますので、[はい] ボタンをクリックします。[はい] ボタンクリック後は、CD を取り出して頂いて構いません。



4 Backup Exec System Recovery のインストール

4.1 インストールのための準備

Backup Exec System Recovery のインストールを行う前に、以下を準備してください。

- Backup Exec System Recovery CD を用意します。

4.2 インストールの実行

以下の手順に従って、Backup Exec System Recovery のインストールを行ってください。

ここでは、すべての機能をデフォルトのパスにインストールします。これ以外の設定を行う場合はユーザーズガイド 第2章 「Backup Exec System Recovery のインストール」を参照してください。

◆ インストール方法

1. Backup Exec System Recovery CD を CD-ROM ドライブにセットします。以下の画面が自動起動しますので、[Backup Exec System Recovery のインストール] をクリックします。なお、OS によっては、「Autorun.exe の実行」または「フォルダを開いてファイルを表示」のいずれかを選択する画面が表示される場合がありますので、「Autorun.exe の実行」を選択してください。



2. 使用許諾規約の条項を一読し、同意する場合は、[使用許諾契約の条項に同意します] にチェックを入れ、 [今すぐインストール] ボタンをクリックします。



- [カスタムインストール]では別フォルダへのインストール、もしくは特定の機能のみのインストールを行うことができます。[カスタムインストール] を行う場合は、ユーザーズガイド 第2章 「Backup Exec System Recovery のインストール」を参照してください。
3. システム構成によっては、リカバリディスクにドライバファイルが含まれていないことを通知するメッセージが表示される場合があります。また、このメッセージが表示されない場合でも、リカバリディスクにドライバファイルが含まれていない場合があります。Backup Exec System Recovery インストール後は、必ずリカバリディスクで起動できるかどうかの検証を行ってください。検証方法については、本書第3章 「[リカバリディスクの検証](#)」を参照してください。また、検証テストが失敗した場合は、ユーザーズガイド 第3章 「カスタムSymantec Recovery Disk CD の作成」を参照して、カスタムリカバリディスクを作成してください。
なお、カスタムリカバリディスクを作成するためには、Windows Server 2008 用のドライバファイルが必要です。ドライバの入手に関しては、ご使用のストレージデバイス、ネットワークデバイスの販売元にお問い合わせください。

4. 以下の画面が表示されますので、[完了] ボタンをクリックします。



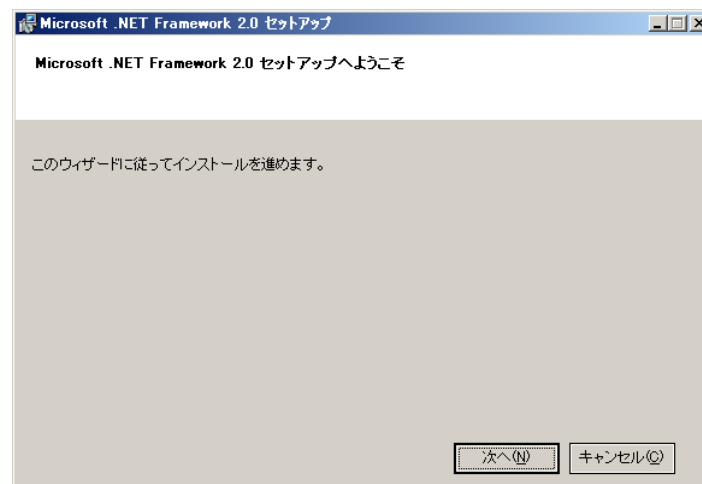
5. 以下の画面が表示されますので、[はい] ボタンをクリックしてシステムの再起動を行います。[はい] ボタンクリック後は、CD を取り出して頂いて構いません。



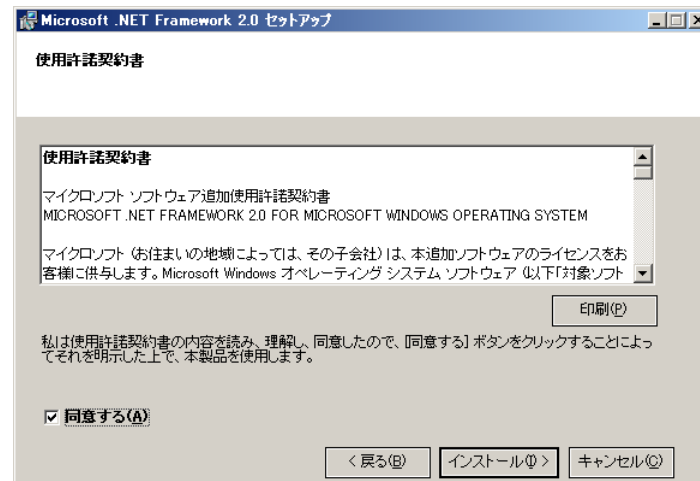
6. コンピュータ上に Microsoft .NET Framework 2.0 が存在しないか、以前のバージョンがインストールされている場合は、以下の画面が表示されることがあります。この場合は Microsoft .NET Framework 2.0 のインストールを行う必要がありますので、[はい] ボタンをクリックします。既に Microsoft .NET Framework 2.0 がインストール済みの場合、画面は表示されませんので、項番 11 へ進みます。



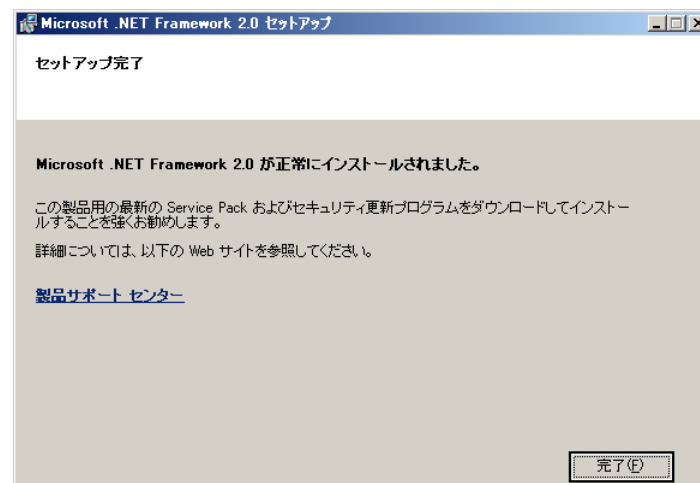
7. [次へ] ボタンをクリックします。



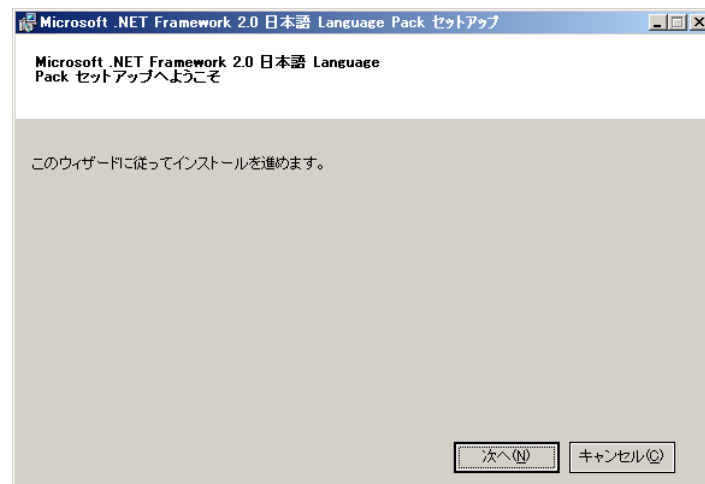
8. 使用許諾規約書の条項を一読し、同意する場合は使用許諾書に [同意する] にチェックを入れ、[インストール] ボタンをクリックします。



9. Microsoft .Net Framework 2.0 のセットアップが完了すると、以下の画面が表示されますので、[完了] ボタンをクリックします。



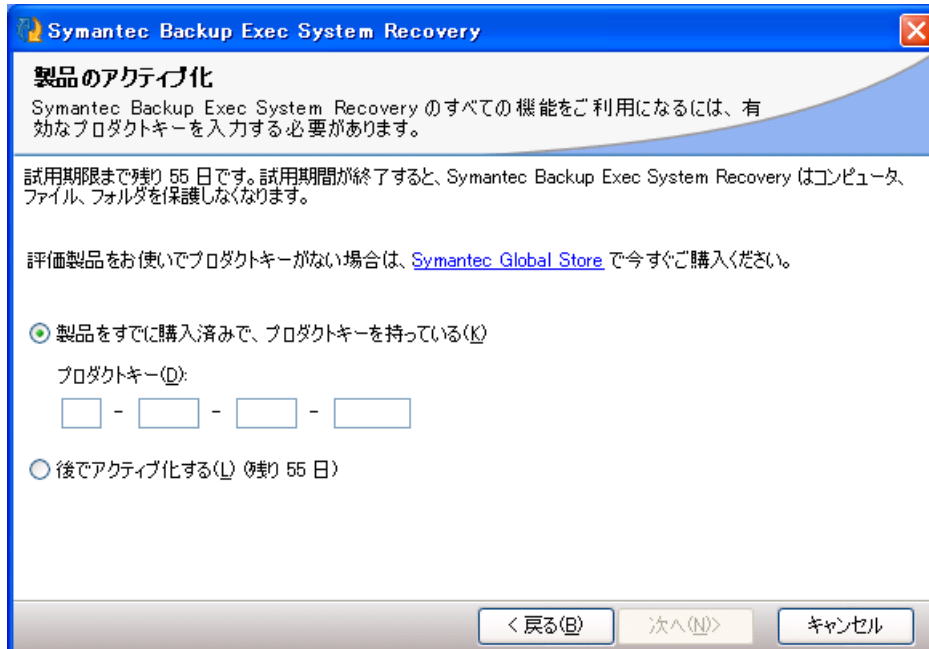
10. 続いて [Microsoft .NET Framework 2.0 日本語 Language Pack セットアップ] が起動しますので、インストールを行います。インストール手順は Microsoft .Net Framework 2.0 と同じとなりますので、詳細な説明は省略します。



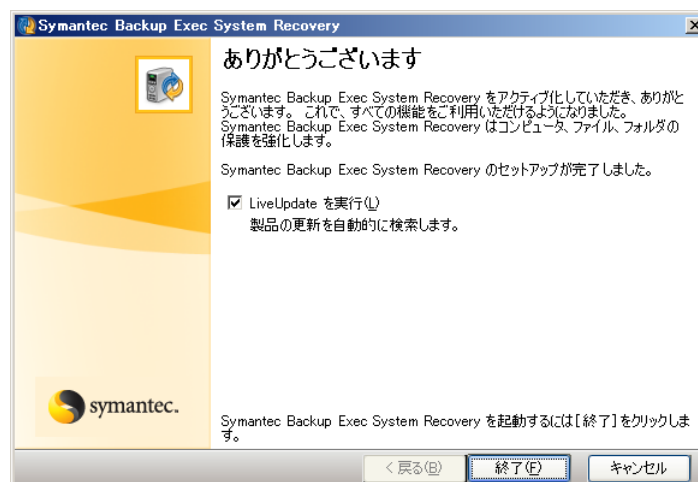
11. 以下の画面が表示されますので、[次へ] ボタンをクリックします。



12. 以下の画面が表示されますので、プロダクトキーを入力し、[次へ] ボタンをクリックします。



13. ライセンス認証が完了した画面が表示されましたら、[LiveUpdate を実行] のチェックをはずして [終了] ボタンをクリックします。なお、LiveUpdate を実行すると最新の状態に更新することができますので、インターネットに接続されている場合はのちほど手動で LiveUpdate を実行することを推奨いたします。詳細はユーザーズガイド 第2章「Backup Exec System Recovery の更新」を参照してください。



5 バックアップ

5.1 コンピュータのスケジュールバックアップ

バックアップ定義ウィザードで、コンピュータのドライブ単位のバックアップをスケジュールリングし、バックアップを自動実行することができます。ドライブ単位のバックアップでは、ドライブ全体のバックアップを、リカバリポイントとして作成します。リカバリポイントには、ファイル、フォルダ、デスクトップ設定、プログラム、およびオペレーティングシステムなどのすべての情報が含まれます。また、リカバリ時はコンピュータ全体だけでなく、ファイルやフォルダ単位でも復元することが可能です。

ここでは、オプションがすべてデフォルト設定であるドライブ単位のバックアップスケジュールを作成します。これ以外の設定を行う場合はユーザーズガイド 第 6 章「ドライブベースのバックアップの定義」を参照してください。

また、**Backup Exec System Recovery** では GUI での設定によるバックアップの他にリカバリディスクからのコールドバックアップを行うこともできます。こちらの手順については、ユーザーズガイド 第 6 章「修復環境からのワнтаイムバックアップの実行について」を参照してください。

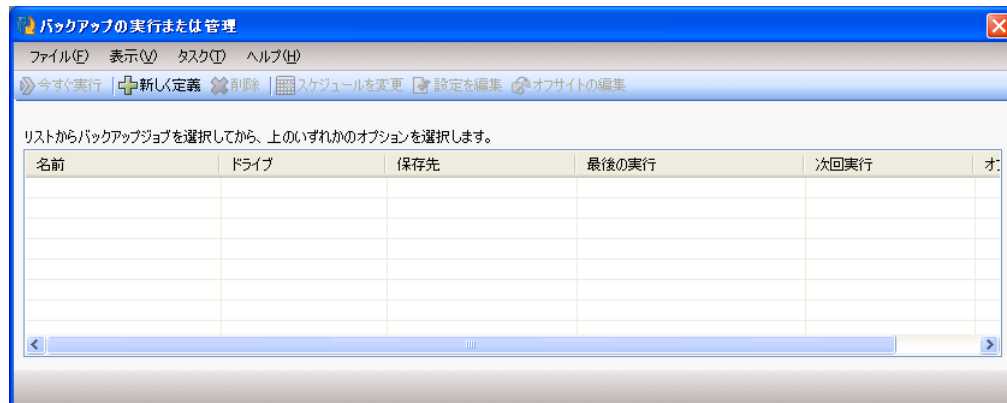
なお、ドメインコントローラとなっているコンピュータのバックアップを行う場合は、事前に必ずユーザーズガイド 付録 C 「Active Directory について」を参照してください。特に **Windows 2000 Server** 上でドメインコントローラが実行されている場合は、**Backup Exec System Recovery** を使ってすべてのシステムを保護する前に、**NTbackup** を使って **Active Directory** データベースのバックアップを作成する必要があります。

◆ バックアップのスケジュール設定方法

1. [スタート] → [すべてのプログラム] → [Symantec] → [Backup Exec System Recovery] → [Backup Exec System Recovery] を起動し、[ホーム] ページの [バックアップの実行または管理] をクリックします。



2. 以下の画面が表示されたら [新しく定義] ボタンをクリックします。



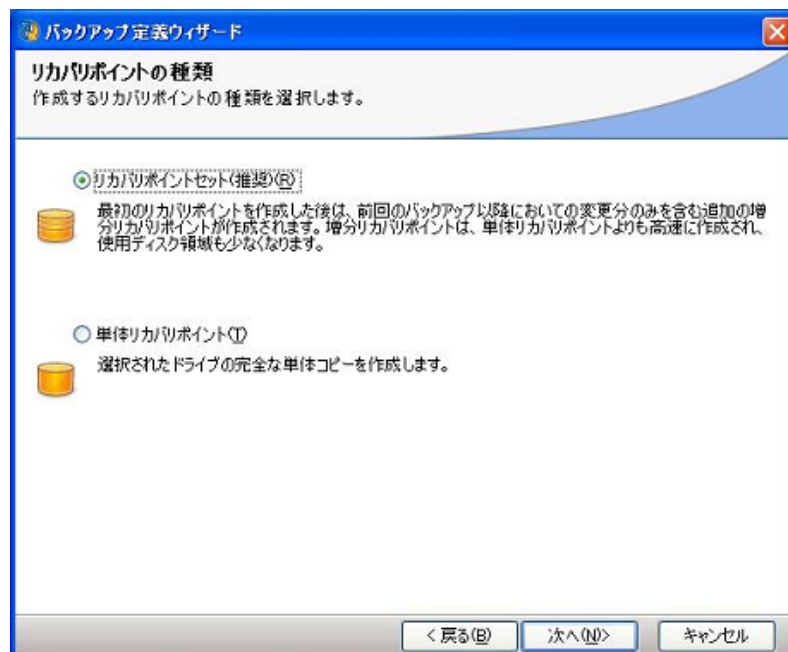
3. [コンピュータのバックアップ] をチェックし、[次へ] ボタンをクリックします。



4. バックアップ対象のドライブを選択し、[次へ] ボタンをクリックします。



5. バックアップタイプを選択し、[次へ] ボタンをクリックします。



- リカバリポイントセット

最初に完全リカバリポイントを作成した後、次回から増分リカバリポイントを作成します。

増分リカバリポイントは変更のあった増分のみを取得するため高速です。

- 単体リカバリポイント

毎回、選択したドライブの完全リカバリポイントを作成します。増分のスケジューリングは行いません。

6. 作成するリカバリポイントの保存場所を入力します。保存先をネットワーク上にした場合は、[ネットワーク資格情報] で、適切なユーザ名とパスワードを入力します。設定が終わったら、[次へ] ボタンをクリックします。

バックアップ定義ウィザード

バックアップ先
バックアップデータ保存先を指定します。

フォルダ(F):
%iStorage\data 参照(W)...

ネットワーク資格情報

ユーザー名(U): administrator ?

パスワード(P): *****

リカバリポイントファイル名をカスタマイズ(C)...

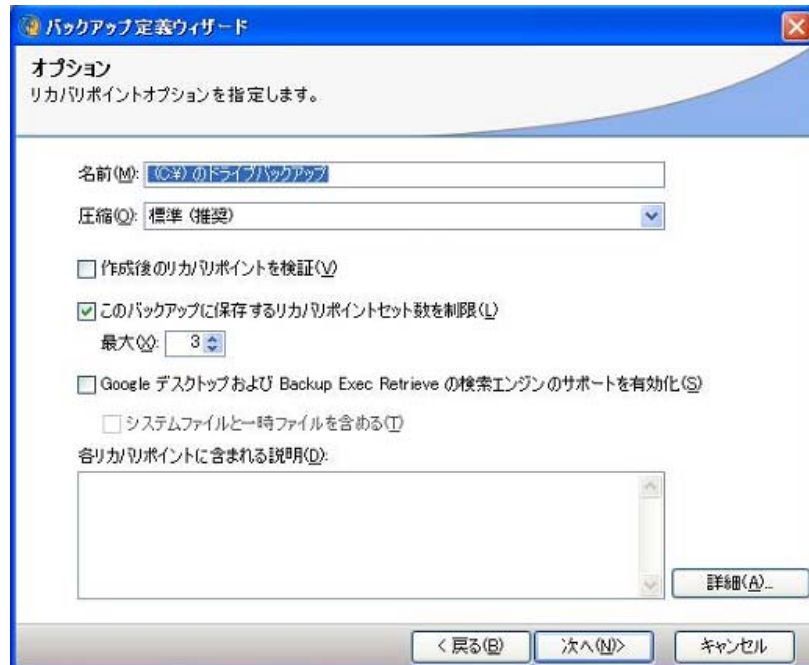
オフサイトコピー 追加(A)...

オフサイトコピーを使用することでリカバリポイントの保護が強化されます。
オフサイトコピーでは、リカバリポイントのコピーが1つまたは2つの保存場所で作成されます。
リムーバブルドライブ上にリカバリポイントの拡張コピーが保存された後はオフサイトの保存場所に移動させることができます。

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル

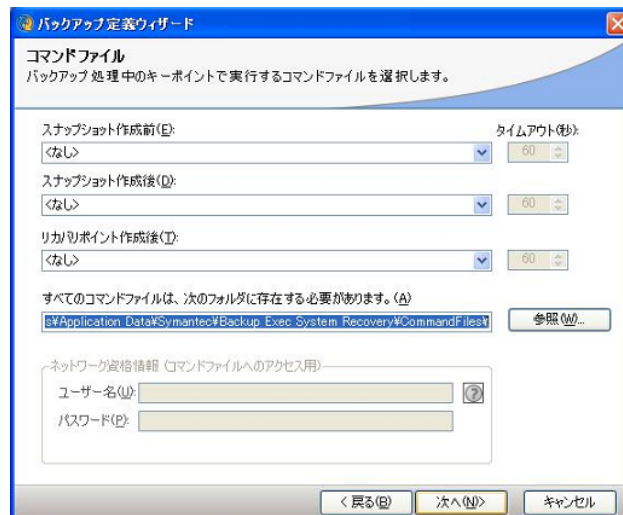
- 必要に応じてリカバリポイントファイル名のカスタマイズ、オフサイトコピーの追加を行うことができます。オフサイトコピーについての詳細は、ユーザーズガイド 第6章 「オフサイトコピーについて」を参照してください。

7. [次へ] ボタンをクリックします。



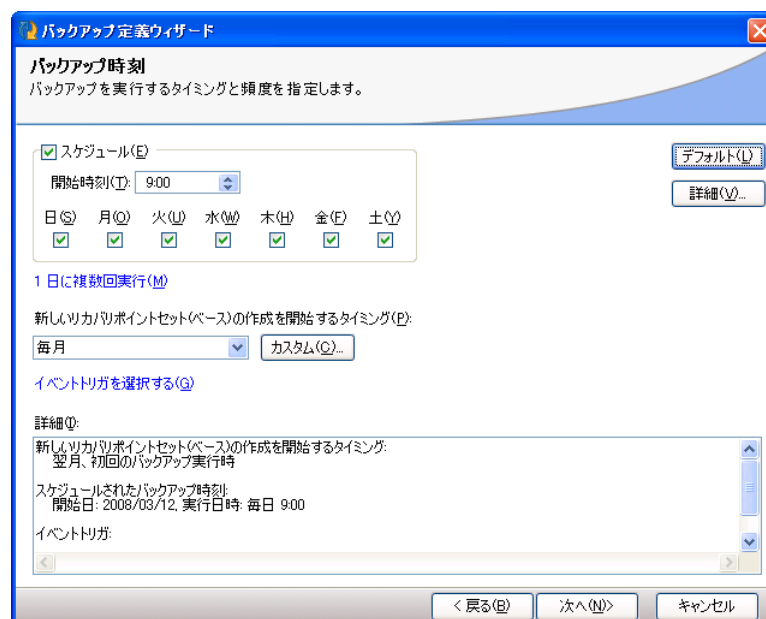
- 必要に応じて名前のテキストボックスでバックアップ名を変更することができます。また、そのほかにもバックアップ作成のオプションを設定できます。オプションについての詳細は、ユーザーズガイド 第 6 章 「ドライブベースのバックアップの高度なオプションの設定について」を参照してください。

8. [次へ] ボタンをクリックします。



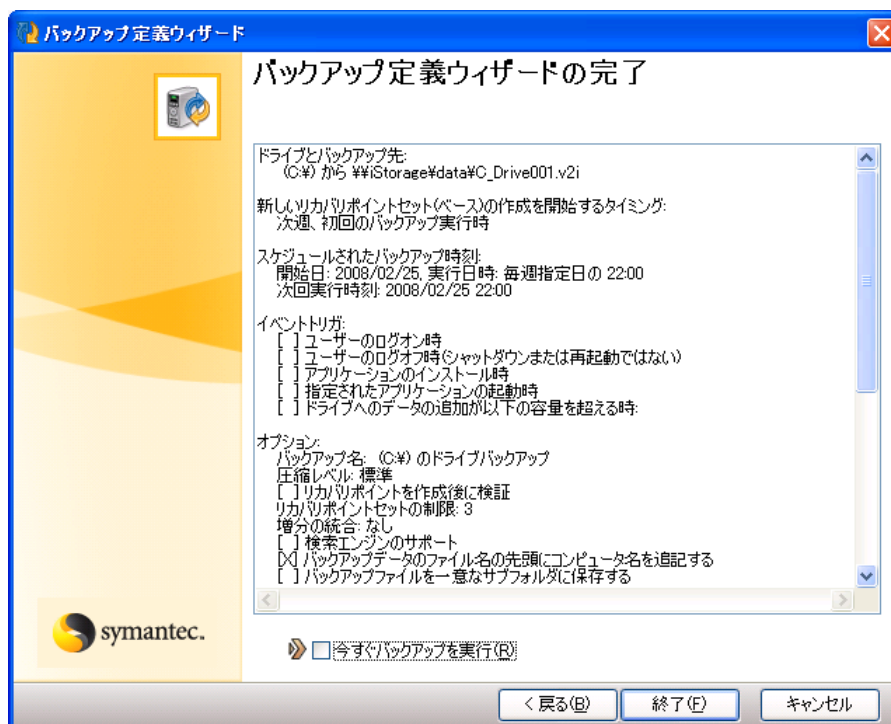
- 必要に応じてコマンドファイルを設定することができます。詳細は、ユーザーズガイド 第 6 章「バックアップ中のコマンドファイルの実行について」を参照してください。

9. [スケジュール] にチェックを入れ、[デフォルトボタン] をクリックします。デフォルトのスケジュールが設定されますので、[次へ] ボタンをクリックします。



- デフォルトでは毎朝 9:00 にバックアップを開始し、月の初回のバックアップで完全リカバリポイントを作成するスケジュールが設定されますが、必要に応じてスケジュールの編集、イベントトリガの設定をすることができます。イベントトリガについての詳細は、ユーザーズガイド 第 8 章 「イベント起動バックアップの有効化」を参照してください。

10. 以下の画面が表示されますので、設定した内容を確認し [終了] ボタンをクリックします。



設定終了後は、スケジュールに従ってバックアップが行われます。

5.2 バックアップに関するアドバイス

バックアップを実行する場合、次のアドバイスを参考にしてください。

- コンピュータのハードディスクに問題が発生した場合でも、リカバリポイントを **iStorage NS** のようなストレージサーバのネットワーク共有に保存しておくと、システムを復元することができます。
- コンピュータで作業中にバックアップが開始された場合、コンピュータの処理速度が低下することがあります。処理速度が低下した場合、バックアップの速度を落とすことでコンピュータのパフォーマンスを向上させることができます。詳細は、ユーザーズガイド 第 8 章 「バックアップ速度の調整」を参照してください。
- スケジュールされたバックアップを開始するためには、コンピュータの電源をオンにし、システムを起動しておく必要があります。
- 定義したバックアップの設定情報は、後で編集することができます。詳細は、ユーザーズガイド 第 8 章 「バックアップ設定の編集」を参照してください。
- バックアップ中は、ディスクのデフラグプログラムを実行しないでください。リカバリポイントの作成に要する時間が大幅に増加し、システムリソースの問題が発生することがあります。
- データベースサービスなどのプログラムにおいて、データが複数のドライブに配置されている場合は、それらすべてのドライブを同じバックアップジョブに含める必要があります。**Backup Exec System Recovery** では、複数のドライブをバックアップ定義ウィザードで選択して、同時にバックアップすることができます。
- バックアップ中に、コンピュータの電源管理機能が **Backup Exec System Recovery** と競合することがあります。この場合、バックアップに問題が発生する可能性がありますので、スケジュールされたバックアップ中には、電源管理機能を無効にしてください。
- システムの復元に必要となるリカバリディスク には、コンピュータに対応した各種ドライバが含まれている必要があります。トラブルが発生する前に、リカバリディスク で起動できるかどうか検証しておいてください。検証方法については、本書第 3 章 「[リカバリディスクの検証](#)」を参照してください。また、検証テストが失敗した場合は、ユーザーズガイド 第 3 章 「カスタムSymantec Recovery Disk CD の作成」を参照して、カスタムリカバリディスクを作成してください。なお、カスタムリカバリディスクを作成するためには、**Windows Server 2008** 用のドライバファイルが必要です。ドライバの入手に関しては、ご使用のストレージデバイス、ネットワークデバイスの販売元にお問い合わせください。

- ドメインコントローラとなっているコンピュータのバックアップを行う場合は、事前に必ずユーザーズガイド 付録 C 「Active Directory について」を参照してください。特に Windows 2000 Server 上でドメインコントローラが実行されている場合は、Backup Exec System Recovery を使ってすべてのシステムを保護する前に、NTbackup を使って Active Directory データベースのバックアップを作成する必要があります。
- スケジュールバックアップが実行されるためには設定した時間にコンピュータの電源が入っている必要がありますが、オプション設定によってバックアップの動作予定日に電源が入っていない場合でも次回 OS 起動時にバックアップを実行することが可能です。
設定手順は以下となります。
 1. [タスク] → [オプション] → [トレイアイコン] をクリックします。
 2. [システムトレイアイコンを表示] と [未処理のバックアップを表示] と [システムトレイに関する質問を表示] をチェックします。
 3. [OK] ボタンをクリックします。

上記設定を行うと、ログオン時に未処理のバックアップの実行を求めるメッセージが表示されますので、[はい] をクリックしてバックアップを実行してください。

6 リカバリ

ドライブ単位のバックアップを行っている場合は、リカバリポイントを使用して、システムおよびデータドライブ、またはファイル・フォルダ単位の復元ができます。

6.1 リカバリディスクによるコンピュータの復元

システムドライブを復元する場合は、リカバリディスクを利用します。OS 上で起動した **Backup Exec System Recovery** の画面上にも [コンピュータの復元] の項目がありますが、システムドライブの復元には使用しません。

ここではファイルサーバの共有フォルダに格納されたリカバリポイントを使用しての復元を行います。ローカルディスク上にバックアップファイルが存在している場合はユーザズガイド 第 14 章「コンピュータの修復」を参照してください。

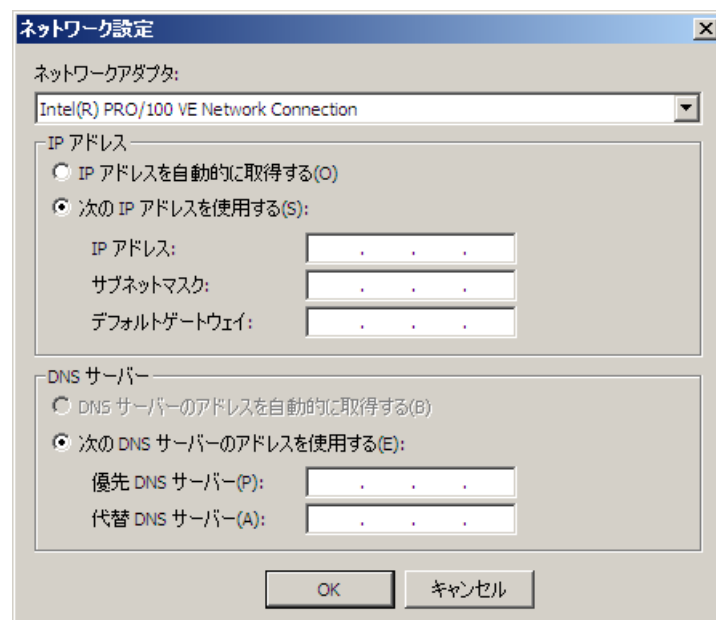
◆ コンピュータの復元方法

1. リカバリディスク を CD-ROM ドライブにセットし、CD よりシステムを起動します。
2. [エンドユーザー使用許諾契約] 画面が表示されますので、使用許諾規約の条項を一読し、同意する場合は [同意する] ボタンをクリックします。
3. ネットワークサービス起動確認画面が表示されますので、[はい] ボタンをクリックします。10 秒間何も選択しないと [はい] ボタンを選択したとみなし、自動的に次へ進みます。以降、DHCP 環境でない場合は IP アドレスの設定が必要になりますので、項番 4 に進みます。DHCP 環境の場合は設定する必要がありませんので、項番 6 に進みます。

4. [ネットワーク] → [ネットワーク接続を設定] をクリックします。



5. [次の IP アドレスを使用する] のラジオボタンを選択し、適切な値を入力します。入力が終わったら [OK] ボタンをクリックします。

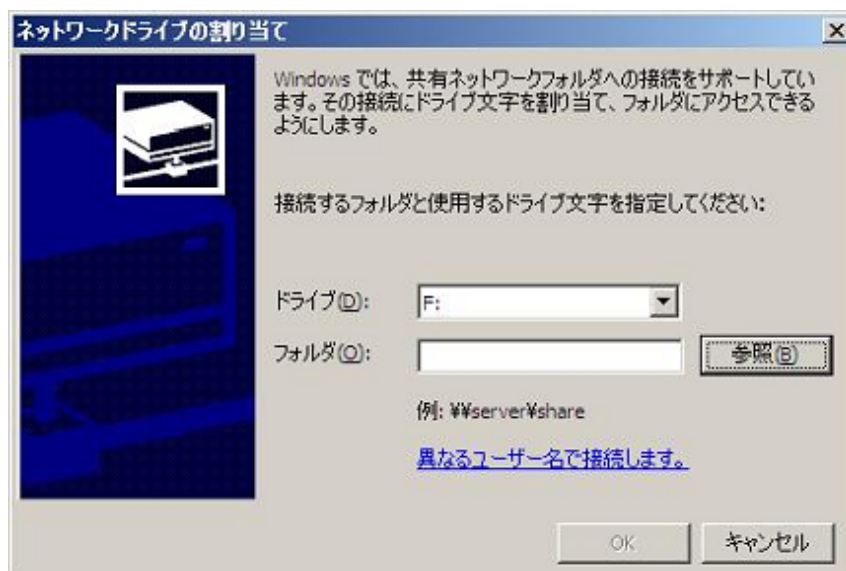


- ネットワークアダプタは 1 枚のみ指定可能です。

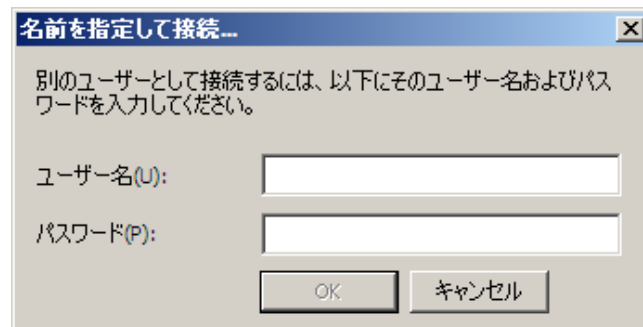
6. [ホーム] → [ネットワーク ドライブの割り当て] をクリックします。



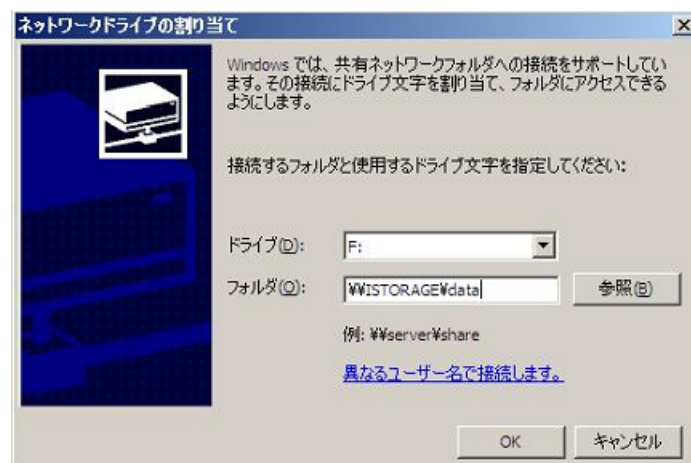
7. 以下の画面が表示されますので、使用するドライブ名を選択し、[フォルダ] のテキストボックスにリカバリポイントが保存されているコンピュータ名および共有フォルダへのパスを入力します。入力が終わったら [異なるユーザー名で接続します] をクリックします。



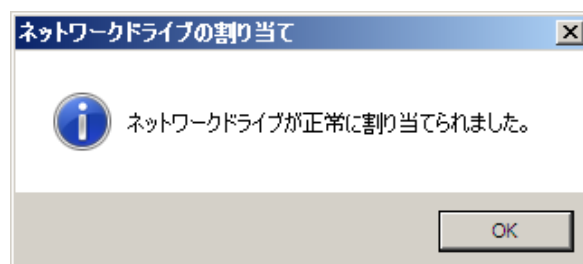
8. 適切なユーザ名とパスワードを入力し、[OK] ボタンをクリックします。



9. [OK] ボタンをクリックします。(共有フォルダ名を指定しても、[OK] ボタンが無効の場合は、共有フォルダ名の後ろにスペースを入力すると、[OK] ボタンが有効になります。有効になった後、入力したスペースを削除してください。)



10. 接続が終了すると、以下の画面が表示されますので、[OK] ボタンをクリックします。



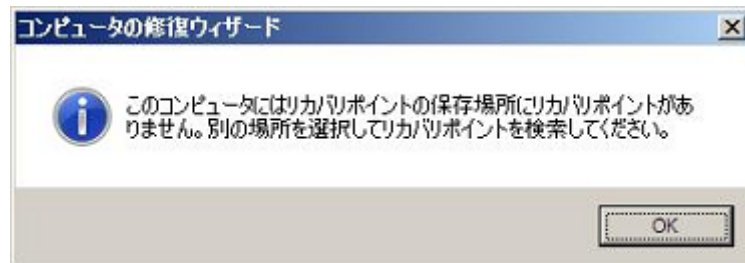
11. 修復ウィザードを起動させるために、[修復] → [コンピュータを修復] をクリックします。



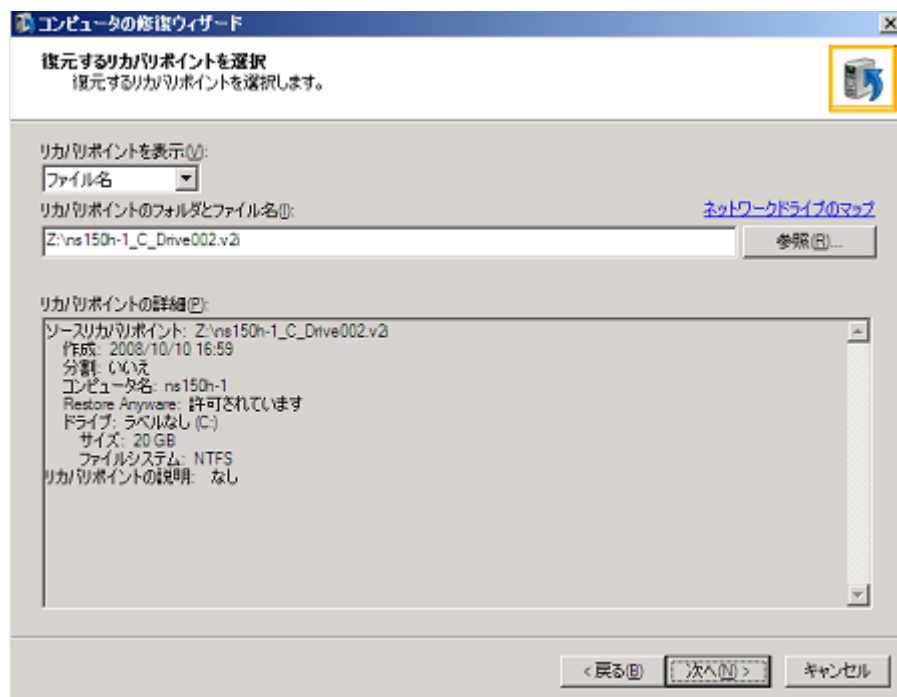
12. 以下の画面が表示されますので、[次へ] ボタンをクリックします。



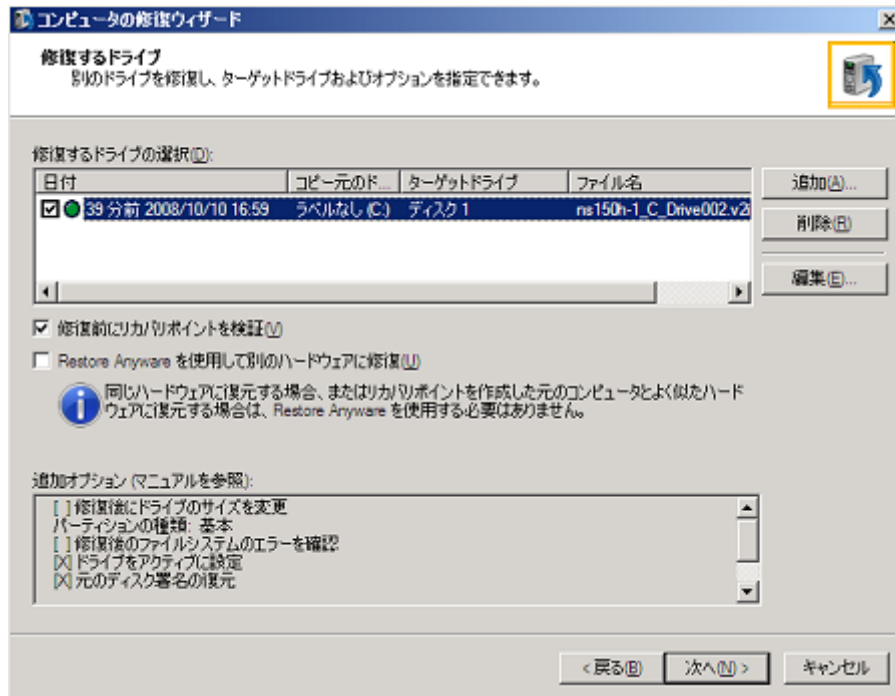
13. 以下の画面が表示される場合がありますが、[OK] ボタンをクリックします。



14. 以下の画面が表示されますので、[表示] 項目のプルダウンメニューで [ファイル名] を選択し、[参照] ボタンをクリックして、リカバリポイントを指定し、[次へ] をクリックします。

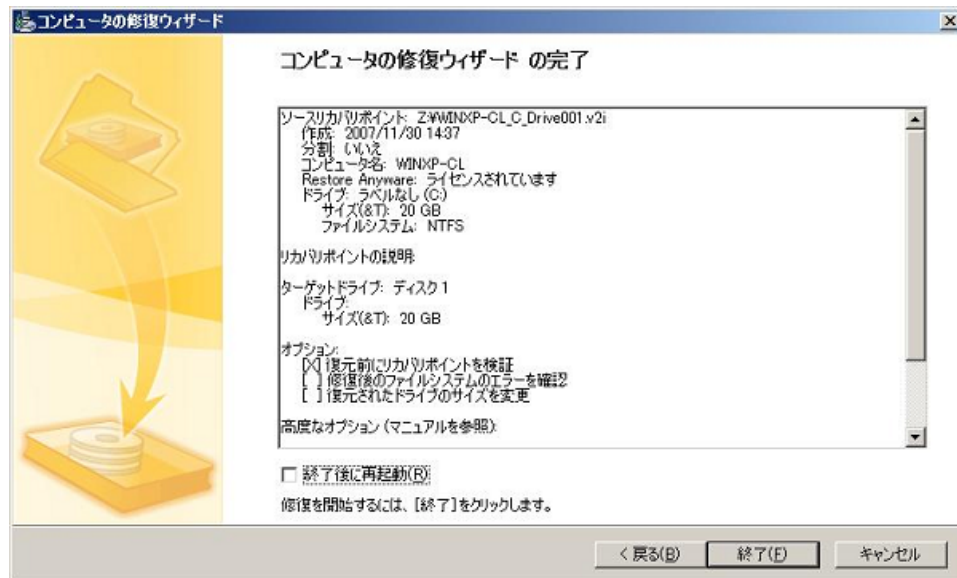


15. 修復するドライブの選択をして[次へ] ボタンをクリックします。

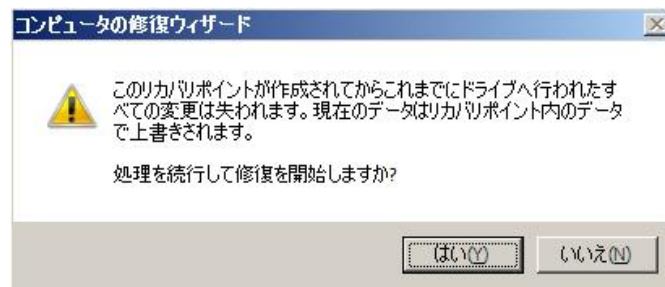


- 必要に応じて「修復前にリカバリポイントを検証」、「Restore Anyware を使用して別のハードウェアに修復」の設定を行うことができます。Restore Anyware の詳細は、ユーザーズガイド 第 14 章 「Restore Anyware を使用した復元」を参照してください。
- 以下の編集を行う場合には、「編集」ボタンをクリックして編集を行ってください。
 - ・ターゲットドライブの選択
 - ・未割り当て領域の編集
 - ・修復後のファイルシステムのエラーを確認
 - ・ドライブをアクティブ(ブート OS 用)に設定
 - ・元のディスク署名を復元
 - ・マスターブートレコードの復元

16. 以下の画面が表示されますので内容を確認して、[終了] ボタンをクリックします。



17. 以下の警告画面が表示されますので [はい] ボタンをクリックします。



18. 復元が完了しましたら、[閉じる] ボタンをクリックします。[閉じる] ボタンクリック後は、CD を取り出して頂いて構いません。



6.2 ファイルやフォルダの復元

Backup Exec System Recovery では、ドライブすべてを復元するだけでなく、指定したファイルやフォルダのみを復元することもできます。

◆ ファイルやフォルダの復元方法

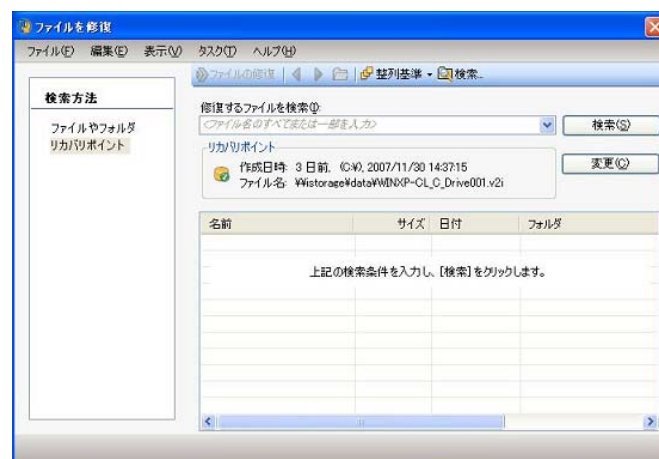
1. [スタート] → [すべてのプログラム] → [Symantec] → [Backup Exec System Recovery] → [Backup Exec System Recovery] を起動します。



2. [タスク] ページを選択し [ファイルを修復] をクリックします。

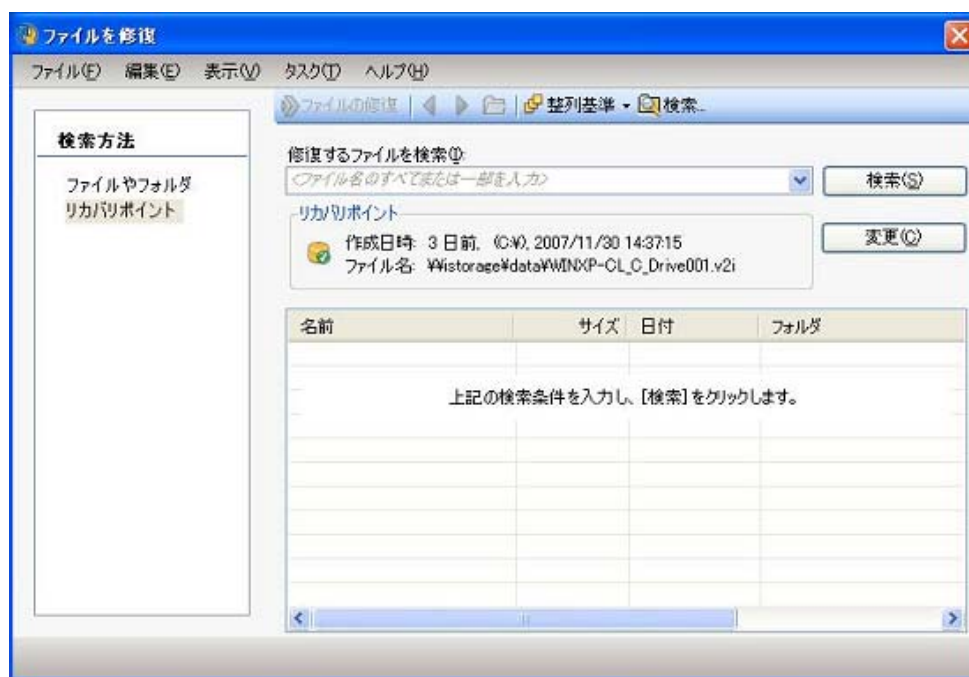


3. 検索方法を [リカバリポイント] にすると、最新のリカバリポイントが表示されます。



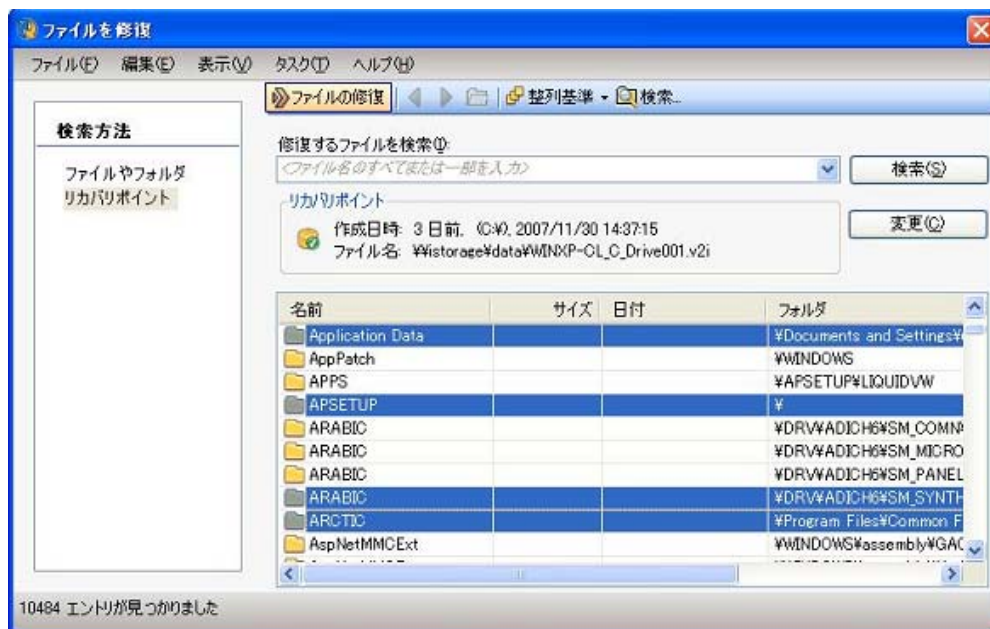
- [変更] ボタンをクリックすることで、別のリカバリポイントを指定することもできます。詳細は、ユーザーズガイド 第 13 章「リカバリポイントを使用したファイルやフォルダの修復」を参照してください。

4. 以下の画面が表示されますので、[検索] ボタンをクリックします。

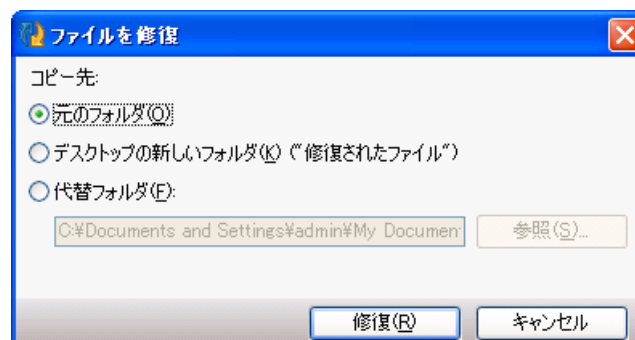


- 必要に応じて、検索条件を指定することもできます。詳細は、ユーザーズガイド 第 13 章「リカバリポイントを使用したファイルやフォルダの修復」を参照してください。

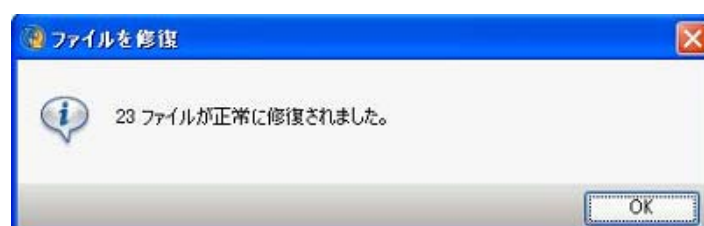
5. 復元したいファイル、またはフォルダを選択し、[ファイルの修復] をクリックします。



6. 復元先を選択し、[修復] ボタンをクリックします。



7. 完了後、以下の画面が表示されますので、[OK] ボタンをクリックします。



7 注意制限事項

- 英語版のリカバリディスクを使用すると、キーボード配列が英語キーボードの配列になりますのでご注意ください。
- バックアップ中に、コンピュータの電源管理機能が **Backup Exec System Recovery** と競合することがあります。この場合、バックアップに問題が発生する可能性がありますので、スケジュールされたバックアップ中には、電源管理機能を無効にしてください。
- バックアップ中は、ディスクのデフラグプログラムを実行しないでください。リカバリポイントの作成に要する時間が大幅に増加し、システムリソースの問題が発生することがあります。
- **Windows 2000 Server**、**Windows 2000 Advanced Server** の環境に **Google** デスクトップをインストールした状態で、**GUI** からデータドライブのリストアを行うと、リストアに失敗しさらにリストア対象ドライブのドライブレターが削除される問題が発生することがあります。

Google デスクトップを使用している場合は、下記の回避策のいずれかに従ってリストアを行ってください。また、既にドライブレターが削除されてしまった場合も同様の方法でリストアを再度行ってください。

- リストア前に、リストア対象ドライブを手動で削除してからリストアを行う。

(注意)

この場合は[今すぐ修復] ボタンでのリストアはできませんので、カスタム設定で正しいリストア対象領域とドライブレターを手動にて設定してください。

- リカバリディスクを使用して、**CD** からシステムを起動してのリストアを行う。

(注意)

既にドライブレターが削除されている場合もこの方法でリストアを行うことはできませんが、**OS** の再起動後リストア対象ドライブに正しいドライブレターが割り当てられていない場合があります。その場合は **Windows** の「ディスクの管理」画面にてドライブに正しいドライブレターを手動で割り当ててください。

- Internet Explorer のバージョンが 5.0、5.5 である場合、Backup Exec System Recovery 8.5 のインストール CD を CD ドライブに挿入すると「クラスが登録されていません」というエラー画面が表示されメニューが起動できないことがあります。

エラーを回避するためには、Internet Explorer を 6.0 以上にアップデートするか、もしくは下記の場所のインストールモジュールを直接実行してインストールを行ってください。

<CD ドライブのドライブレター>¥INSTALL¥SETUP.EXE

なお、本回避策はインストールには有効ですが、Backup Exec Retrieve を利用してファイルのリストアを行う場合は Internet Explorer 6.0 が必須となりますのでご注意ください。

- Windows 2000 の環境で作成したリカバリポイントを、RestoreAnyware を用いて異なる機種にリストアしたとき、OS 起動でブルースクリーン (0xc000026C) が発生することがあります。この場合は下記の回避策に従って、USB2.0 に関するレジストリ情報を変更してください。

警告：レジストリエディタの誤った使用は、システム全般に渡る重大な問題を引き起こす可能性があります。こうした問題を解決するためには、OS をインストールしなおさなければいけません。NEC では、レジストリエディタを使用することによって引き起こされた障害の解決については、一切保証しておりません。レジストリエディタを使用する場合には、お客様の責任において使用してください。

1. リカバリディスク を CD-ROM ドライブにセットし、CD よりシステムを起動します。
2. [エンドユーザー使用許諾契約] 画面が表示されますので、使用許諾規約の条項を一読し、同意する場合は [同意する] ボタンをクリックします。
3. ネットワークサービス起動確認画面が表示されますが本手順ではネットワークへの接続は必要ありませんので、[いいえ] ボタンをクリックします。
4. [分析] → [コマンドシェルウインドウのオープン] をクリックします。
5. コマンドプロンプトで「regedit」と入力して エンターキーをクリックし、レジストリエディタを起動します。
6. [コンピュータ] の下の階層の、[HKEY_LOCAL_MACHINE] を展開します。展開はフォルダの左側に表示されている [+] をクリックして実行します。
7. [ファイル] → [ハイブの読み込み] をクリックし、「c:¥Winnt¥System32¥config¥system」のファイルをロードします。
8. 「USB」と入力して [OK] ボタンをクリックします。
9. 項番 6.と同じ要領で、以下のフォルダに移動します。
[HKEY_LOCAL_MACHINE¥USB¥SYSTEM¥ControlSet001¥Services¥usbhub20¥]
10. レジストリエディタの右側画面に表示される START という名前のエントリをダブルク

リックします。

11. 値を、4 に変更します。
12. HKEY_LOCAL_MACHINE¥USB¥SYSTEM¥ControlSetxxx(xxx は数字)のすべてと、
HKEY_LOCAL_MACHINE¥USB¥SYSTEM¥CurrentControlSet のフォルダにおいて、項
番 9.から 11.の操作を繰り返します。
13. 項番 8.で入力した「USB」をクリックします。
14. [ファイル] → [ハイブのアンロード] をクリックし、ポップアップ画面で [はい] ボタン
をクリックします。
15. コンピュータを再起動して、OS を起動します。

またこの方法で問題が解決しない場合は、BIOS より USB2.0 を無効にしてください。

- リカバリディスク中にご利用中のハードウェアのディスクを認識するためのデバイスドライ
バが存在しない場合（本書第3章「[リカバリディスクの検証](#)」にて、ディスクが認識できな
い場合）に「コンピュータのバックアップ」を実行すると、ウィザード中でカーソルが砂時
計、次の画面に進むボタンがグレーアウトとなり先に進めなくなります。この画面は終了さ
せることはできませんが、この状態でメニュー画面の「ドライバのロード」より適切なドラ
イバをロードした後にあらためて「コンピュータをバックアップ」を実行することにより、
問題なくバックアップを行うことができます。
- リカバリディスクより起動して、「ドライバのロード」にてロードするドライバを選択する際、
ファイルを開く画面でファイルの種類のドロップダウンリストが文字化けする場合があります
が、プログラムの動作には問題ありません。
- ご利用のハードウェアにて、ネットワークやディスクを認識するためのドライバを追加して
カスタムリカバリディスクを作成する際に、「カスタムの修復環境の作成中にエラーが発生し
ました。」のエラーが発生することがあります。本件が発生した場合はカスタムリカバリディ
スクの作成ではなく製品添付のリカバリディスクから修復環境を起動した後、「ドライバのロ
ード」にてデバイスドライバをロードすることでリストアを行ってください。

8 FAQ

◆ 増分バックアップが実行中に中断された場合、どのようなになるのですか？

リカバリポイントが正常に作成されず、エラーファイルとなる場合があります。エラーファイルは、統合されず不正ファイルとして残りますが、次のスケジュール時には適切な完全リカバリポイント、あるいは増分リカバリポイントが作成されます。

◆ 複数の世代のバックアップを取る場合、バックアップ中に保存先のハードディスクの空き容量が足りなくなった場合、どう処理されますか？

指定したリカバリポイントセット数に達する前にハードディスクの空き容量が不足すると、定期的リカバリポイント処理が正常に実行できなくなり、現在のリカバリポイントが作成されません。バックアップ開始前に、ハードディスクの空き容量を確認しておく必要があります。

◆ 複数の世代のバックアップを取る場合、指定した数に達した場合はどうなりますか？

指定した制限数に達した場合は、まず最新のリカバリポイントが作成されて保存された後に、以前に作成した最も古いリカバリポイントが削除されます。完全リカバリポイントの場合、関連する増分リカバリポイントも全て削除されます。

指定した数よりも 1 つ多いリカバリポイントを保存できるだけのハードディスクの空き容量が必要です。

◆ リカバリポイントの作成中に、ファイルが更新された場合のプロセスはどうなりますか？

Backup Exec System Recovery 8.5 のバックアップは、次のようなプロセスで実行されます。そのため、バックアップが開始された後にデータが更新されても、バックアップの信頼性が失われることはありません。

- ① バックアップ開始
- ② スナップショットを作成しメモリに格納します
- ③ スナップショットからイメージファイルに書き込みます。

9 障害時の問い合わせ方法

障害についてお問い合わせいただく際は、障害の内容に関係なく、以下の情報を添えて、PP・サポートサービスへ問い合わせてください。

- 障害発生日時
- 障害内容
- システム構成（バックアップ格納先が別の装置の場合は、その装置の構成も含む）
- 再現手順と再現頻度
- SeaST ログ

SeaSTログは「[9.1 SeaSTログ採取方法](#)」に従って採取してください。ただし、リカバリディスクから起動して操作中に障害が発生した場合は「[9.2 リカバリディスク起動時のSeaSTログ採取方法](#)」に従ってください。

なお、SeaST ログはシステム内に存在する現時点までのログを収集しますので、事前の準備は不要です。

9.1 SeaSTログ採取方法

障害が発生した場合、SeaST ログは以下の手順で採取します。

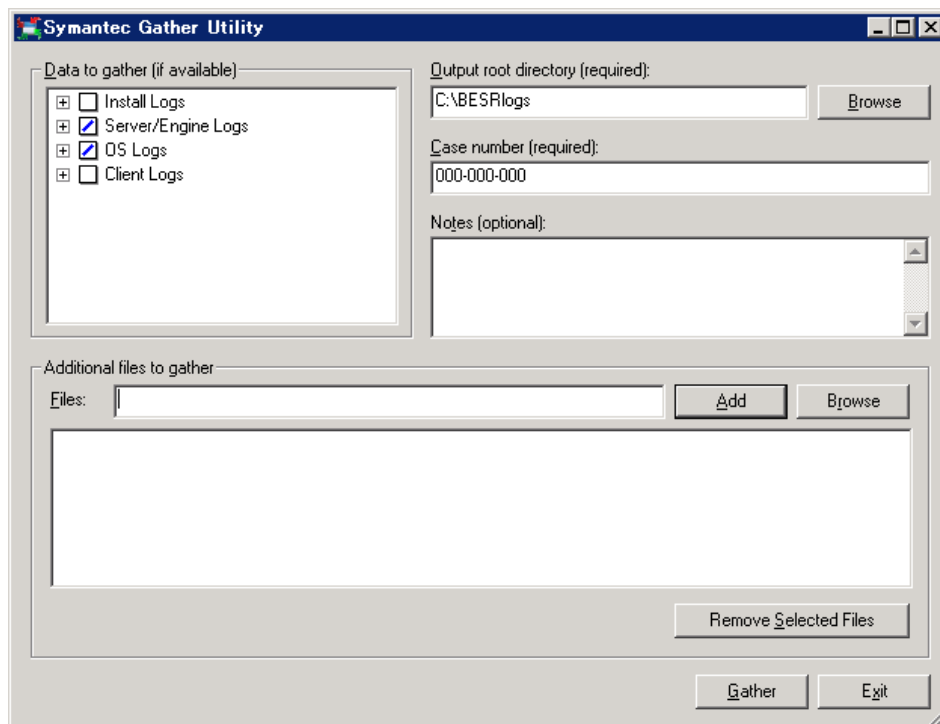
◆ SeaST ログの採取方法

1. エクスプローラを起動します。
2. 以下のフォルダを開きます。フォルダが存在しない場合は 項番 4. へ進みます。
C:¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥Symantec¥Backup Exec System Recovery
3. フォルダ内に **Support** フォルダが存在していた場合は **Support** フォルダを削除します。
4. 以下のフォルダを開きます。なお、手順内のフォルダのパスは、**Backup Exec System Recovery** をデフォルトでインストールした場合のものとなります。インストールフォルダを変更されている場合は、その配下をご確認下さい。
C:¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec System Recovery
5. フォルダ内に **Support** フォルダが存在していた場合は **Support** フォルダを削除します。
6. **Utility** フォルダを開きます。
7. フォルダ内の **SeaST.exe** をダブルクリックで実行します。

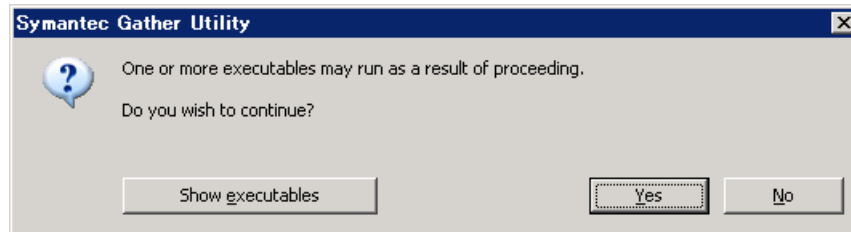
8. [テクニカルサポート情報の収集] をクリックします。



9. [Symantec Gather Utility] の画面が起動しますので、[Output root directory] にログの出力先となるパスを、[Case number] に "000-000-000" を入力し、[Gather] ボタンをクリックします。

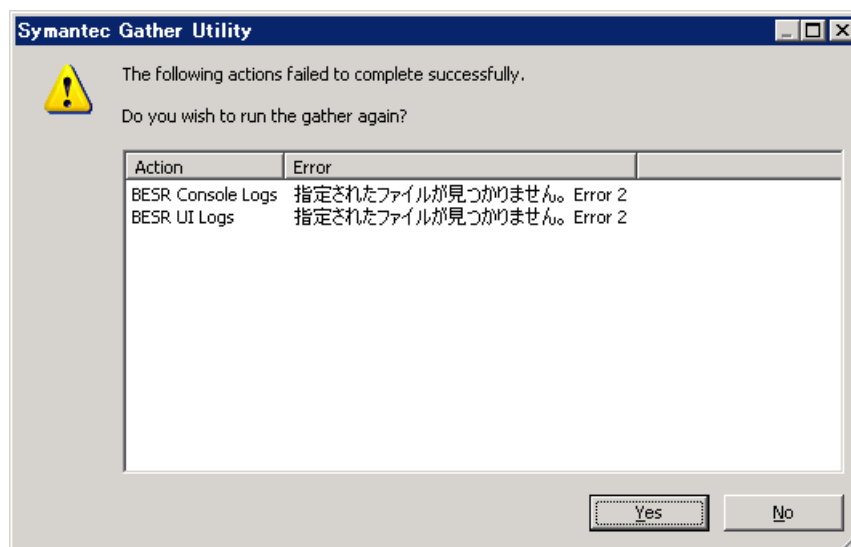


10. 以下の画面が表示された場合は[Yes] ボタンをクリックします。

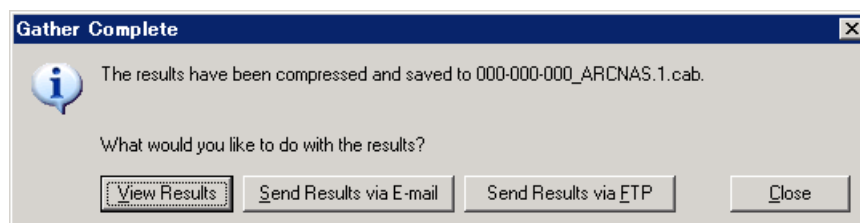


11. 情報収集が完了するまで数分間待ちます。

12. 以下のような画面が表示された場合は、[No] ボタンをクリックします。



13. 完了のメッセージが表示されますので、[Close] ボタンをクリックします。



14. 項番 9.で指定した場所に「000-000-000_<コンピュータ名>」フォルダが作成されますので、このフォルダごと採取します。

- **system.nfo** ファイルの生成に時間がかかる場合があります。サポートツールの実行後、**system.nfo** ファイルが 0 バイトでないことを確認してからログデータを取得してください。

9.2 リカバリディスク起動時のSeaSTログ採取方法

障害がリカバリディスクでの起動時に発生した場合、SeaST ログは以下の手順で採取します。このログは障害発生後、再起動の前に採取してください。

◆ リカバリディスク起動時の SeaST ログの採取方法

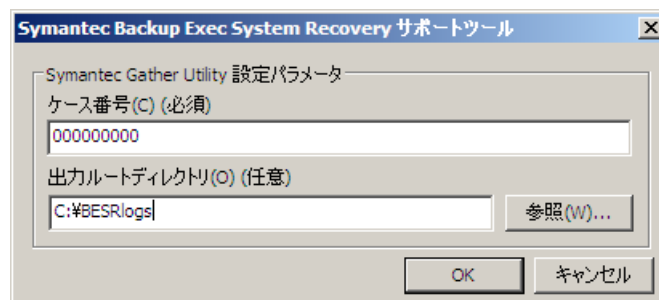
1. リカバリディスクのメニュー画面にて、[ユーティリティ] → [サポートツールの実行] を選択します。



2. [テクニカルサポート情報の収集] をクリックします。



3. [ケース番号] に "000000000" を、[出力ルートディレクトリ] にログの出力先となるパスを入力し、[OK] ボタンをクリックします。



- デフォルトではログの保存先に X ドライブが表示されていますが、X ドライブのデータは再起動により消えてしまいますので、保存先に他のドライブを選択するか、もしくは採取したデータを再起動前にネットワーク共有フォルダなどに移動させてください。
4. 情報収集が完了すると、3.で指定した場所に「000000000_<ランダム文字列>」フォルダが作成されますので、このフォルダごと採取します。